



EL PRIMERO 誕生 50 周年

50 年の成功を振り返って

第 2 章：

1970 年 – 1979 年：密かな反抗

1970 年代の El Primero の運命を理解するために、このキャリバーが誕生する 11 年前のことを思い出してみよう。

1958 年、Gérard Bauer (ジェラルド・バウアー) がスイス時計協会会長に就任しました。彼は時計業界の経験はありませんでしたが、明確なビジョンと、1948 年にアメリカで発達し始めた電子工学が時計産業で決定的な役割を果たすことになるという確信を持っていました。そこで、共同で Centre Electronique Horloger (電子時計センター) を創立するようスイスの時計メーカーに働きかけました。アメリカ合衆国の時計メーカー、ブローバが世界最初の 360Hz 振動音叉式電子時計 Accutron を発表したのと同じ年です。センターは 1962 年 1 月 20 日に発足し、ゼネラル・エレクトリック社の Roger Wellinger (ロジャー・ウェリンジャー) が所長に就任しました。

このセンターで、クォーツの研究が極秘のうちに進められました。「Beta」と名付けられたこのプロジェクトは 1967 年 8 月に完了。同年 11 月には 10 個の「Beta 2」モデルがヌーシャテル天文台コンクールに参加し、セイコーのモデルを抑えて上位 10 位を占めました。ところが、セイコーは 1969 年、El Primero クロノグラフが発売された数か月後のクリスマスに、他社に先駆けて世界最初のクォーツ時計 Astron-35 Sq クロノグラフを市場に投入し、スイス時計産業を負かしました。1970 年、スイスの時計ブランド 16 社は Beta 21 ムーブメントを搭載したクォーツ時計の販売に向けてコンソーシアムを設立。ゼニスもその一社でした。スイス産業はほどなくアメリカのメーカーに追いつかれます。モトローラ、テキサス・インスツルメンツ、ナショナル セミコンダクターといったブランドです。とはいえ、どのブランドも日本のセイコーやシチズンに追いつくまでには至りませんでした。

こうした状況の中で、El Primero の将来はいったいどうなるのでしょうか？ El Primero にとって最大の危機は、実は内部からやって来ました。1971 年 5 月 28 日、ゼニスは、ゼニスのオーナーであったシカゴのラジオ・テレビメーカー、ゼニス・ラジオ・コーポレーションに売却されたのです。合併会社 MZM (Mondia Zenith Movado) は消滅し、1972 年 6 月 21 日の総会の終わりに、社名が Zenith Time SA に改められました。その瞬間から、ゼニスの未来は完全にアメリカ本社の経営陣の手中に委ねられることになったのです。

この時期、El Primero ムーブメントはまだマニファクチュールのカタログに掲載されていましたが、それは売れ行きが好調だったということではありません。クォーツムーブメントとの激しい競争の中で、自動巻機構はとうてい勝ち目のないように見えました。結果的に、El Primero ムーブメントを、Beta 21 キャリバーを搭載したケースとそっくりの大型のケースに収めた驚くべきゼニスウォッチが登場しました。この最初のクォーツムーブメントはサイズが大きく、大型のケースに収めてこれをデザインでできるだけ目立たなくする必要がありました。ゼニスは、適切な答えのヒントを電子時計のケースに見出したのです。結局、人類は月面着陸に成功したのです。

から、1961年にSF作家ロバート・A・ハインラインがStranger in a Strange Land（『異星の客』）で断言した最初の火星探検ロケットの打ち上げもはや時間の問題でしょう…。

それまでの数十年間は、時計のデザインよりも機能美が優先される傾向がありましたが、1970年代、ファッション性は必ずしも機能性に追随するものではなくなっていました。大きさの変わらないEl Primeroムーブメントを必要以上に大きなケースに収めたのもそうした理由からです。未来と宇宙をイメージした、斬新で空間的な広がりのあるフォルム。アレクサンドラ・ミダルは、著書Introduction à l'histoire d'une discipline（研究分野の歴史入門）で、「物理法則の持続性、永遠に奪うことのできない偉業の不変性といった現代社会における標準化の基盤が、ポップカルチャーという新しいイデオロギーに揺さぶられている」と書いています。1970年代の“ポップデザイン”の出現は、それまでとは別の形を作り出すことを可能性にした新技術の台頭によって促されました。こうして、分厚いラウンドの形が誕生しました。例えばAH 781のリファレンス番号を持ったEl Primeroのケースです。そのすぐ後には、デザインがテレビの形を思わせるEl Primeroが登場しました。ここで、当時家庭でテレビが果たす役割が重要性を増していたことを思い出す必要があるでしょう。El Primeroが発表されたとき、テレビ局は1つしかなく白黒映像でしたが、1970年代、カラーテレビの普及とともに世界が限りなく広がりました。新たな制覇です。

1974年は事業が完全に中断した年でした。ゼニス生産速度を落とし、カタログにも新しいEl Primeroの姿は見えなくなりました。アメリカ本社の経営陣にとっても、機械式腕時計に未来はなく、逆にクォーツへの信頼は高まる一方でした。1975年、時計業界が深刻な危機に陥っていたときに、彼らは機械式ムーブメントの生産を中止することを決定し、1976年には工具類や機械を処分することにしました。El Primeroは安価で売却され、解体して回収できるものはすべて回収するよう命令が下りました。そうした状況の中で、El Primeroムーブメントを、さらにはマニュファクチュールゼニス全体を救うことになる一人の人物が現れます。Charles Vermot（シャルル・ベルモ）です。

Charles Vermot（シャルル・ベルモ）は第4工場の責任者でした。深刻な状況や、時計製造部門の仕事が半減していたという事実にもかかわらず、彼は機械式時計に未来があると信じていました。そこで、アメリカにいる経営陣を説得するために次のような手紙を送りました。「進歩に反対するものではありませんが、私は、この世の中ではさまざまな周期が繰り返されるという現象に注目してきました。機械式自動巻クロノグラフが完全に消えてしまうと考えるのは間違いです。世界も昔からそれを目撃してきましたが、ファッションの流行は周期的に繰り返されるという傾向から、いつか当社が利益を得ることができると私は信じています。」彼は、小さな工房にEl Primeroの製造器具を保管する許可を求めましたが、結局その願いは聞き入れられませんでした。

「必要な工具類を安全な場所に隠そう」。本社の命令に反して、彼はそう決めます。自分の職を失うことよりも、これまで積み上げられてきた貴重なノウハウが失われてしまうことを恐れたのです。「それだけは何としても避けねばならない。」この作業には、やはりゼニスでプレス機の製造を担当していた、弟のMaurice Vermot（モーリス・ベルモ）が手を貸してくれました。まず、Charles Vermot（シャルル・ベルモ）にとって宝物同然のプレス機、カム、切削工具、図面、設計図を隠すための安全な保管場所を見つけることが必要です。マニュファクチュールゼニスにある18の建物のうち、他の建物と連絡していない、ちょうど良い建物が一つだけありました。

本社からの命令に背いたのですから、隠しているところを見つけるわけにはいきません。彼は、夜間に、建物の後ろの誰もいない通路を通過して、工具類をこの隠し場所に移して行きました。セキュリティシステム万全の今日では考えられないことです。当時ここにはたくさんのタイムレコーダーがありましたが、Charles Vermot（シャルル・ベルモ）はマニファクチュールの鍵を持っていました。何しろ一工房の責任者なのですから。

今日、この屋根裏部屋へ通じる52段の階段を登ってみると、弟の手を借りて大切な工具類を懸命に運んだ彼の姿を容易に思い浮かべることができるでしょう。見つかりませんように、とひやひやする方もいるかもしれませんが、しかし、Charles Vermot（シャルル・ベルモ）は自らの信念を貫き、すべてを未来に賭けるしかないと思いました。それが彼に力と勇気を与えたのです。結局、彼のおかげで、約150台のプレス機と、数多くの小型工具、カムが救われました。これらのプレス機がなければ、El Primeroの再生産は不可能だったでしょう。実際に、これらの工具類はこのムーブメント用に特別に設計されており、企業秘密の一部でした。

ところで、プレス機の寿命は構成部品の寿命と同じくらいの長さで、適切なメンテナンスが行われている場合ほぼ20年から30年です。当時、プレス機1台は4万スイスフランしていました。アメリカ本社の命令どおりに道具を廃棄していたら…。せっかく開発した技術がすべて失われていたとしたら…。Charles Vermot（シャルル・ベルモ）が隠した工具類を再び整えるのに、700万スイスフランもの投資が必要だったでしょう。しかし、ムーブメントを復活させるために誰もそのような大金を投資しなかったでしょうし、ゼニスが今日まで生き延びることなかったかもしれません。

Charles Vermot（シャルル・ベルモ）は、屋根裏部屋に隠した工具類が誰にも見つからないよう、この部分に壁を作りました。El Primeroの未来を固く信じていたからこそ、たとえその未来の中に自分の姿がなくとも、危険を顧みず、自らの義務をまっとうしたのです。

1976年のゼニスには、かつてのマニファクチュールの面影はもうありませんでした。従業員の数は大幅に減り、工房で生産される腕時計にはETA製やCitizen製のクォーツムーブメントが搭載されていたからです。極端に減った機械式ムーブメントでさえ、自社製ではなくETA社から調達されていました。もはや利益のないマニファクチュールと縁を切ろうと、1978年、ゼニス・ラジオ・コーポレーションはスイスのメーカー三社で構成される合併会社にゼニスを売却しました。そのうちの社は、時計ケース加工ツールをはじめとする高精度機械工具専門メーカーのDixi社です。オーナーのPaul Castella（ポール・カステラ）は、ル・ロックルでは伝説的な人物で、人間味にあふれ、危機に見舞われたこの地方で雇用を維持することを強く気に掛けていました。こうしてゼニスは、業界に精通し、時計製造に強い関心を持つ人物の手に委ねられることになったのです。彼の目標は、スイス時計産業の歴史的遺産とは切っても切れないマニファクチュールを何としても救うことでした。